

哲学カフェ de ぎふ

せんしゅう

千秋まちかど文庫 通信



運営委員会発行(記録:安藤彰浩、編集:中川健史)(主宰:吉田千秋 090-7917-9602 yoshida0@sepia.ocn.ne.jp)

第178回哲学カフェ例会(2023,4.13)

《子育て支援はどうあるべきなのか?》

「現在の子育ては様々な困難にぶつかっている。国家や社会の発展のためではなく、一人ひとりの幸せのために子育て支援が行われなければならない。このことを強く感じた。」

<問題提起> 主宰者:吉田千秋

・今日のテーマである「子育て支援」をめぐる問題の大枠を説明します。岸田内閣は先日、「異次元の子育て支援の対策」のたたき台となる試案を発表しました。その内容は、出産費用の無償化や児童手当の充実といった、主に子育て世帯を財政的に支援する提案からなっています。その他、子育ての負担軽減のために、保育サービスを拡充することが大きな課題となります。そのために必要なことは保育士の手当てを充実させ労働環境を改善して、保育士の数を増やさなければなりません。また家計を圧迫する教育費の負担軽減のために、奨学金の拡充や、新たに大学院生の授業料を当人の就職後に後払いする案も提案されています。

・こうした様々な提案がなされていますが、肝心なことは提起された内容の対策が妥当なもので、本当に目的とされる効果を発揮するものであるのかということです。さらに、仮に効果が期待できるとして、そのために必要となる費用を何処から用立てるのかということです。

・子育て支援の問題が議論される背景には、少子化という大きな問題に直面している現実があります。少子化は全く予想外の事態だったという訳ではありません。事態はかなり前から非常に深刻でした。なぜ岸田内閣が急に「異次元の少子化対策」を政治課題として取り上げたのでしょうか。どうも統一地方選を控えて国民にアピールしようとする選挙対策の思惑が見えてきます。今回の支援策を評価する声も聞かれますが、国民の多くは懐疑的で、期待できると答えた人の割合は、世論調査によれば、30%程度に留ま



ります。

・メディアの多くは、必要な巨額の財源が示されていないことに懸念を示しています。主だった財源案は、①子育て支援に目的を定めた増税や国債の発行する案、②国有財産から生じる余剰金を用いる案、③社会保険料(年金積立、医療保険、介護保険等)を上乗せする案です。特に今注目されているのは③案で、現役世代が支払う保険料を引き上げれば、積立金を払っている個人及び企業の双方に負担を課すことになってしまいます。そこで子育ての負担の無い、年金生活をする高齢者に負担増を求めるのが最も簡単です。でも、月に5~6万円の国民年金だけで暮らしている高齢者に負担増を求めれば、生活を破綻させる恐れもあって限界があります。結局、消費税を上げるといった話になってしまう可能性が高いと言わざるを得ません。

・子育てを財政的に支援するだけで少子化の問題が

解決する訳ではありません。直接的な子育て支援である保育サービスを拡充させることが必要です。そのために本気で働き方改革を行って、働きながら子育てをしなければならない人たちの生活の負担を軽減することが重要です。だから、長時間労働を削減することや男親の育児休暇を取り易くすることを行うことが少子化対策の鍵となります。教育に懸るお金が家計を著しく圧迫している問題に対応することも必要です。子どもを大学に通わせる費用は半端なものではありません。案では大学院生のために「授業料後払い制度」を提案していますが、これでは本当の問題解決になりません。「異次元の対策」と言うなら、思い切って大学の授業料を無償化すべきではないでしょうか。

・さらに子育てにはジェンダー平等の視点が重要です。男は仕事、女は育児といった古い人間観、家族観を克服する必要があります。この点における根本的な視点の転換が日本の大きな課題と言えるでしょう。所帯を単位として支援するのが日本の制度の基本になっていますが、欧米のように個人を単位として支援することを考えるべきです。子育ては国のた

めではなく、あくまでも個人の幸福の追求のために行われると考えられなければなりません。国の仕事は個々の人々を助けることで、そのために社会的環境といった子育ての条件を整えることです。

・政府は、少子化は良くないことだという前提で、国民の危機感を煽っているようにも見えます。政府の少子化対策の理解の根底には、国民を国家発展のための労働力としてのみ捉える見方が横たわっています。だが子どもを産み育てることはあくまでも個人の人生の選択の問題であることを忘れない様になければなりません。戦後の日本において経済成長が幸福の前提、国作りの在り方の大前提となっていました。いま幸福の中味が問われています。地球環境を壊しかねない大量生産、大量消費、大量廃棄を生み出し、歯止めの掛からなくなっている資本主義の在り方をあらためて問い直さなければならない段階に来ている様に思われます。少子化問題を考える際も、思い切って世界の捉え方を転換する視点が必要かもしれません。

・今日は、それぞれの子育て体験を含めて、いま必要だと思われることを率直に出しあいたいと思います

<意見交換>



*少子化は本当に悪いことなのか。出生率が下がれば将来的に働き手が少なくなる。その結果、現役世代の年金保険料の支払いによって支えられている年金制度の維持が困難になる。だから少子化は駄目だというのが政府の理屈である。このような問題を資本主義の下で解決できるか。

*人口が減少すれば当然国内の消費は全体として縮小する。消費が縮小すれば国内で活動する企業の収益も少なくなる。物が売れなければ経済は低迷する。しかしそれは誰にとって悪いことか。

*6歳になる姪が今小学校に通っている。授業に生

活科と呼ばれる科目がある。日常の生活を具体的に学ぶ実際の授業らしい。私たちは学校でもっと実際に生活に本当に役立つことを学ぶ必要がある。教育は子どもたちを競争に駆り立てるばかりである。生まれて来た子どもを厳しい現実が待っている。こうした状況を変えることも必要である。

*子育ては苦勞が多くお金もかかる。それよりも人々は個人の欲望の満足を追求する人生を選ぶ。でも個人のエゴを咎めることはできない。文明は結局、衰退する定めにある。

*国連は世界の人口がやがて100億を越えると予測している。人類は野放しに繁殖していて、気候変動の中、貧困拡大、食糧危機、紛争多発で、人類は危機に直面すると警告する。しかし、2050年人類史上初めて人口減に転じると全く反対の予測する学者もいる。根拠は少し曖昧だが、人類は既に限界に達していると言う。実際、多くの国で人口は減り始めていて、この傾向が現在人口増にある国にも広がる。人

類はやがて自滅するというこらしい。

*少子化問題はもう少し身近な所で具体的な問題として考える必要がある。少子化が長く続けば当然人口は減る。町工場の様な中小企業の多くが、仕事が無いからではなく、人手が足りないとか、後継者不足といった理由から、廃業を余儀なくされるという話を聞く。至る所で、人出が足りなくなっていて、企業活動が縮小または停止の危機に直面している。もうかなり以前から、人手不足は深刻であったが、政府は問題の根本的解決の努力を怠って来た。日本には他の先進諸国と違い移民政策がない。企業活動を維持するためには働き手を外から連れて来るしかない。保守政権はナショナリズムというイデオロギーの壁のために、外国人の受け入れの必要を直視することができない。特定技能実習制度という偽りの看板の下、外国人労働者を低賃金で働かせて、ごまかしている。

*産婦人科で働く助産婦さんに言わせると、子どもを産みたいと思っている人は少なくない。必ずしも人々が個人の物質的な欲望の満足のことばかり考えているということではない。問題は子育てが大変というよりも、教育費などお金が掛かり過ぎることにある。

*子どもを育てる環境が整っていないということは金だけの問題ではない。

*国は少子化の問題を真剣に考えていない。前時代の家族観に縛られていて、結婚の在り方も法律婚しか認めようとしない。子育ては実際お金が掛かる。行政の財政支援は欠かせないが、事実婚の子どもは同じ支援が得られない。子どもを大学まで生かせると一人当たり2000万円掛かるという試算がある。

*核家族化が進んで、共働きの世帯では家に子どもの世話をする者がいない。自分はパートナーはいるが、結婚しない選択をした。行政の公的サービスにおいて法的に結婚していないと差別待遇をされる。

*昨年、日本で初めて、生まれた人の数より死んだ人の数の方が多かったというニュースを聞いた。100歳の母親を病院に連れて行くと不必要な薬を一杯処方される。もう少し意味のあるお金の使い方がある。子どもの数が多ければ多いほどよいという訳ではない。助け合って子どもを育てる環境が失われた。姪が離婚して、一人で子どもを育てることになった。子育



てをする母親を助ける制度が必要である。

*現金のバラマキは反対である。子育てをしている家庭に対する現金給付はどんなものか。親が自分のために使ってしまうば意味を成さない。多くの人が子どもの教育にお金を使うよりも、自分の楽しみに使っている。教育そのものの無償化が有効である。

*少子化が進んで、子どものいない地域が生まれている。就職氷河期の世代は多くが結婚できず子どもがいない。この世代はやがて介護の問題に直面する。介護の必要な人がいても介護をする人材がいない現実が生まれる。人口のバランスが崩れて、多くの地域で生活が困難になりつつある。もっと社会福祉にお金を使う必要がある。社会福祉で国が潰れるってことはない。社会福祉に使われるお金はそのまま必要な消費に回って地域社会の経済循環を生み出す。年金生活者の消費が間違いなくスーパーの儲けを支えている。年金が目減りすれば、その分スーパーの儲けは減る。

*子どもを産む、産まないはあくまでも個人の自由な選択に委ねられる問題である。子どもを産むという選択を自由にできる社会であるべきである。

*日本人が劣化している。公務員なのに、市の行政を末端で支える自治会に入らない者がいる。若い世代は自治会活動の意義を認めていない。近所に自治会に属さない人が何人もいる。自治会の数も減っている。

*日本人の多くは働き過ぎている。働き過ぎの人たちのお陰で儲けている企業がある。社会全体の利益が何かを考えなければならない。

<意見交流の最後に> 吉田千秋

・今日参加されている方の多くは既に子育てを終えていらっしゃるのではないのでしょうか。私は3人子どもの父親ですが、今振り返ってみると、子育ては大変だったけれど楽しかったように思います。それに比して現在の子育ては大変苦勞がめだっているようです。

・その一つの要因には政治の貧困だけでなく、地域での人のつながりが薄くなってきたことがあげられました。地域の自治会が行政機関の情報を地域住民に伝える「広報会」になっていて、地域での人々の生活をよくするための組織になっていない点が問題です。このことが人々を自治会から遠ざけ、力を合わせて地域づくりができない要因にもなっています。

・さらに、「今だけ、ここだけ、金だけ」という社会の風潮が共同体または地域社会の本来あるべき連帯を弱

めて、子育てをより困難なものにしているように思われます。子育ては到底一人ではできません。しっかりした地域のつながりがあれば、子どもは地域で育てることができます。残念ながら、私たちは一人ひとりがバラバラになって孤立状態に陥っています。「自己責任で生きる」ことが社会生活の基本とされ、子育てがより困難なものになっています。私たちは他人を気づかうことなく生きることを強いられているのです。

・一人ひとりが人として尊重される社会が作られるためには、一人ひとりを尊重する政治の実現が欠かせません。またそういう意識を育む教育が大切になります。そういう政治、教育をめざすためにお互い力を合わせたいものです。

<4月例会感想、意見、便りなど>

○<初めて参加しての感想>

「子育て支援はどうあるべきか」に参加させていただき、ありがとうございました。職業(助産師)上、子育て支援と聞くと、子育てをする人達にどう関わっていくかということしか思い浮かばなかったのですが、今回、この会に参加させていただき、いろいろな伝え方があるんだと考えさせられました。また、政府の政策はお金を分配してるだけではないかと、改めて思うことにもなりました。

昔に比べ、分かりやすい支援は増えてきているとは思いますが、でも今、子育てしたいかと言われたら、したいとは答えないと思います。その理由は一言では言えませんが、生育環境からくるのではないかと思います。一般的な日本人の家庭環境・教育環境、社会環境等の中で、私のように、感じる人は多いのではないかと思います。その場の現金だけでは解決できない何かがあるように感じるからです。知識もないのに言いたいことを言うのはどんなものかとは思いますが、これが現在の私の感じ方です。(初参加さん)

○<子育て支援は保育・教育の充実こそ>

例会へは久しぶりに参加しました。皆さんのいろいろな視点からの意見を聞いて、自分もまた深く物事



を考えてみるという、このような場は貴重ですね。

「子育て支援」については、「各世帯への支給」よりも「保育や教育の充実」のためにお金を使ってほしいと思います。

まずは、望む人が望むように、安心して託児ができる保育システムの充実(24時間保育、保育士の待遇改善)。小学校では学童保育を制限なく誰でも利用できるようにする。子どもが小学校1年生になって帰宅時間が早くなると、それを機会に働けなくなる母親

が結構多いです。夏休みも「学童が定員オーバーで入れなかった、どうしよう」という声をよく聞きます。学童では、学習に自信がない子どもへの補習をしたり、学年の違う子ども同士で交流したりして、利用する子どもも親も安心できる居場所になるとよいと思います。

税金は、困っている人への手助けになることに使ってほしいものです。 (しのだ)

○<子育てしたい環境と教育を>

子どもを産み育てたいと思える環境と、倫理観・道徳観を持てる人の教育が大事ではないかと思いました。

「今だけお金だけ自分だけ」という言葉が心に残り、残念ながらそういう人が多いのを実感します。なぜそういう人が多いのか？と考えたときに、マズローの欲求5段階説を思い出しました。生理的欲求・安全欲求・社会的欲求・承認欲求・自己実現欲求。ある程度の物質的欲求と精神的欲求が満たされる必要がある。

満たされない人が多い・・・。

環境は変えることはできるが、倫理観や道徳観のある人を育てることは難しい。人は他の人から影響を受けます。私は良い影響を与えられる人になりたいと思って、子どもや孫と接しています。 (子猫)

○<「子育て力」の源泉は“労働”の継承？>

日本でも村落共同体が崩壊してから久しいが、家族としては、労働は親などが担うものの、身近で見えるモノではなくなった分、最重要な関心事とはなりにくくなり、地域などでも共同作業もほぼゼロ。一方、労働には対価としての賃金や時給が支給され、主婦の家事労働や老人介護まで金銭で計量される時代だ。

現代では、お金が絶対価値とされ、一方家族や地域はたんなる個の集まりで、かつて発揮されてきた共助の力=社会力は縮小し見えにくくなり、お金で代替できる分野も増えた。

ひるがえって見ると、そんな時代は人類史の中ではごく近い頃からはなかったか。もう10年以上前になるが、フィリピンのミンダナオに滞在した際、電気が通ってない山村を訪ねることがあった。家族は大人数が大半で、人々の生活の中心には労働があり、



子どもはそれを継ぐことが喜びであり、未来のドアを開けることでもあった。

今、親たちの労働の実態や意味が、金銭の多寡以上に大切な意味を持つものとして、子どもに伝わりにくくなってはいないか？ また、子育てにはお金で買えない大切な何かあることを見失ってはいないか？ さらに、それが今の「人間疎外」の一つでは・・・、と思いが巡った。 (フィリピン・ウォッチャー)

○<子育ては子どもの成長を楽しむようにならなければ>

「労働ファースト」は食うためにはやむを得ない時代では当然だが、今はそんなんじゃない。もっと生きることには価値を見出すべきであり、働くことはその価値の一つに過ぎない。その中で、ジェンダー問題も関わってくる。生きることには汲々としていたり、自分が楽しむことで精一杯であれば、とても子どもを産み育てるなんて考えられない。本来子育ては子どもの成長を楽しめるようにならないといけない。

また、教育に金がかかり過ぎることも問題で、大学が就職手形発行所と揶揄されるまでに成り下がっている。勉強のあり方も考えるべきで、いっそ学問ではなく生活に密着した生きる術を教えるべきである。理科や社会の教科が生活科に変わって久しいが、とても良いことと思う。例えば、農業、天候、自然、家族、料理、掃除などの科目を必須として身に付けさせてはどうか。はたして、何割の成人男性が合格点をキープできるであろうか。まずは社会の一員として生活するための家事能力を身につけ、育児休暇の取得も義務付けるべきである。 (ryosa)

<この一冊> 山田健太+たまむらさち共著『「くうき」が僕らを呑みこむ前に』
理論社、2023年1月刊

いま日本では自由にもものが言えない状況が生まれ、ものごとの真偽、良し悪しを自分で判断しない人が増えているようです。世の中の「空気」を読み取って生活しているのです。

こうした状況を分かりやすく説いたのが本書です。といっても理論書ではなく、絵本といってもよいイラストで、「いっしょに考えてみよう」という「読み物」です。ポイントはこの「空気」=「くうき」というのはどういうもので、どのように作られていくのか、それに呑みこまれないようにするにはどうしたらよいかということです。

出発点・土台となる民主主義とは、皆で話し合い多数の意見を採用するが、少数の意見を尊重しないとひどい結果を招くことになりかねないと指摘します。というのも多数派が勢いを増すなかで、「正義のために」「平和のために」「皆のために」と称して、侵略戦争などの誤った方向に導くことがしばしば起きたからです。

こういう状況が生まれるのは、少数派がものを言にくい状況が作り出され、何だかおかしいと思っても、声に出すには勇気が必要で、大変難しくなって来

るからです。結局、ものを言わないで黙っているうちに、考えることもやめてしまい、声高に主張される「流れ」で作り出された「空気」に乗っかり、ものを考えることをやめてしまう人が多数出てきます。これが「サイレント・マジョリティ」です。いま、この状況が生まれつつあるのです。

どうしたらよいのでしょうか。「なんだかおかしい」と感じたら、思いきってそれを人に伝えよう、と呼びかけています。「なんだかおかしい」と思っている人は意外とたくさんいて、いっしょに「空気」を変えられるかもしれませんから。

本書は、『茶色の朝』(フランク・パブロフ作)、『戦争のつくりかた』(りぼん・ぷろじえくと作)に続く警告の書として、今こそ手にしたいものです。

(Sensyu)



この一冊 雑誌『世界』23年5月号特集:「新しい戦前と憲法」、岩波書店刊

昨年12月16日、閣議決定された安保3文書は、国の方向性を大きく変えるものであったにもかかわらず、国会審議も低調であった。本号では、「新しい戦前」とも言われているこの流れに抗するために、何が必要なのか考えることができる特集が組まれています。

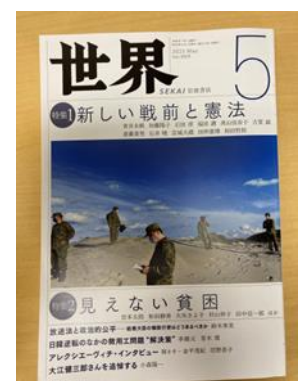
特に私が注目したのは、「2018ぎふ平和のつどい」記念講演者の青井未帆さん(憲法学)の論文「安保三文書改定と私たちの平和構想力」です。この中で青井未帆さんは、「安保政策は20年以上の長い時間をかけて変更を加えてきて、決定的だったのは2014年の閣議決定であった。もはや政府の憲法9条解釈は論理の限界を迎えている。しかし平和や自由を守ることは、国家安全保障だけの問題ではない。私たちの平和構想力は無限なのであって、戦争の準備ではなく、平和の準備をすべきである」と述べ、「平和は私たち一人ひとりの自由や権利を確保するもので

あり、平和へのコミットメントは国内憲法の次元にとどまらない」と指摘されています。

私もこうした立場で、戦争は絶対に起こさせないために平和を希求し、力を合わせてあきらめずに抗してやっていきたいと思っています。この特集では他に、加藤

陽子さん(歴史学)の「現代の安保関連三文書を、戦前期の『帝国国防方針』から考える」や、福田護さん(弁護士)の「改めて問う、『反撃能力』保有の違憲性」をはじめ、学ぶことが多い論文・対談・インタビューが掲載され、すばらしい内容で、私の永久保存版となりそうです。ぜひお読みください。

(takasi)



講演 & 討論会

<資料代> 500円 (学生無料)

<テーマ> ロシアとウクライナ戦争…
日本はどう向き合えばいいのか?

2023年 **7月15日(土)**

午後 2:00~4:30(受付1:30)

長良川スポーツプラザ大会議室

(定員120名) * 地図参照

(〒502-0817 岐阜市長良2070-7 Tel 058-295-6300)

*オンライン参加可能です。末尾の連絡先に申し込み願います。

*ウクライナ戦争の出口はまだ見えてこない。今回は、ロシア・東欧の比較憲法研究を長年続けてこられた竹森さんの話を聞き、とくにロシアとどう向き合ったらよいかを考えたいと思います。

講師 竹森正孝さん(岐阜大学名誉教授)



1946年 岐阜県生まれ。

1970年 名古屋大学法学部卒。

1976年 同大学院法学研究科博士課程終了

東京都立短大、岐阜大学地域科学部教授を経て

2011年より岐阜市立女子短期大学学長。

現在:千住介護福祉専門学校校長

<専門> ロシア・東欧の比較憲法、政治学。

<コーディネーター>

吉田千秋(「哲学カフェdeぎふ」主宰)

1943年大阪市生まれ。京都大学文学部哲学科卒、名古屋大学大学院博士課程中退。元岐阜大学地域科学部教授(哲学)。名古屋哲学セミナー常任講師。「岐阜・九条の会」代表世話人、岐阜平和美術展実行委員会会長。

<連絡先>

吉田 携帯090-7917-9602

Mail: yoshida0@sepia.ocn.ne.jp


中川 携帯090-7432-9158

Mail: takeshi-nakagawa@nifty.com



哲学カフェ 第29期(2023年前半)例会予定 *毎月第2木曜日、午後7:00~9:00

ふれあいスペース⇒コロナ警報で中止の場合あり、テーマも変更あります。連絡下さい。

<p>第178回例会 4月13日(木)</p>	<p>「子育て支援はどうあるべきなのか？」 *政府は「異次元の子育て対策」と銘打っているが、どうやら「空次元」。 *必要なのは、一時的な補助金ではなく、恒久的な支援策、制度ではないか。</p>	
<p>第179回例会 5月11日(木)</p>	<p>「日本が世界に貢献できることは何なのか？」 *5月19日から、G7サミットがヒロシマで行われます。さて何をなすべきか。 *唯一の戦争被爆国日本のなすべきこと、9条を持っている日本がなすべきことは何か。</p>	
<p>第180回例会 6月8日(木)</p>	<p>「中国と仲良くできないものか？」 *岸田政権は脅威を煽っていますが、中国と仲良くしたほうが良いのでは。 *例会では、中国と長年交流してきた人の話を聞いて意見交換します。</p>	
<p>第181回例会 7月15日(土) 14:00~16:30</p>	<p>設立15周年記念行事・講演と討論 ◆会場 長良川スポーツプラザ テーマ「ロシアとウクライナ戦争・日本はどう向き合えばいいのか？」 講演：竹森正孝さん(岐阜大学名誉教授、ロシア・東欧比較憲法研究)</p>	

哲学カフェの運営資金の協力も、よろしくお願いします。

口座記号・口座番号 00810 1 142912

加入者名 哲学カフェ de ぎふ、千秋まちかど文庫

「哲学カフェ de ぎふ」ホームページ 毎回更新中!!

<http://tetsugakucafegifu.jimdo.com/>

右のQRコードをスマホなどで読み取ると、「哲学カフェ de ぎふ」のホームページが開きます。ぜひ閲覧願います。友人・知人に拡散いただければ幸いです。



★先日、「「博物館浴」研究の最前線」と題する講演会が美濃加茂市民ミュージアムで開催され、演題にひかれて参加してきました。話の内容は、日本の少子高齢化社会の動きとあいまって、新しい「博物館」の役割が提案され、大変興味深いものでした。

★「博物館浴」とは聞きなれない言葉ですが、「博物館」を訪ねると、「森林」と同じように、心理的医療効果があることがわかり、「森林浴」にならった新語として使われるようになったようです。

★因みに、「森林浴」効果は森林植物が発生する、揮発性香気成分などの薬理作用のことで、ロシアの科学者、ボリス・トーキン博士が提案したロシア語の「フィトンチド」に由来します。

★それはさておき、実際、カナダを皮切りに、英国や台湾、シンガポールにおいて、「博物館」を訪ね、鑑賞することは、血圧の調整やストレス解消となり、リラククス・セラピー効果があるという研究結果が紹介されました。

★これまで、なんとなく感覚的には健康に良いとされる公園や森林の散策と同様、「博物館」にもセラピー効果があることが、科学的に実証されたのです。これには驚きました。以後、カナダでは、「博物館浴」は心理療法と健康増進のための「処方箋」扱いとなりました。

★日本国内での「博物館浴」に関する研究はまだ始まったばかりですが、今後、教育・文化活動やまちづくりばかりでなく、医療と福祉の分野にも大きな役割を果たしていくことが期待されます。

(島田幹夫)